日本Men's Health医学会・日本臨床泌尿器科医会

メンズヘルスセミナー2007 プログラム

日 時 ： 平成19年4月14日(土) 18:10 ～ 19:40
会 場 ： 第10会場 (神戸国際会議場 5F 会議室502)

ご挨拶

"男面倒見ます泌尿器科"というタイトルの論文を、以前 書いたことがあるが、まさに"生き物・男"としての男の一生を、しっかり医学的に支える泌尿器科学の役割は極めて重いものと考えている。ことに最近、"女性医療"が重視される社会の流れの中で、男性側も頑張らねばならず、今や男性医療の体系を医学界に確立することが急務となってきている。

戦後の我が国の泌尿器科学の歴史は、外科的分野での発展に重点が置かれていた。それは時代の流れとしての必然性でもあり、極めて有意義であったし、それなりの泌尿器科学の新時代を創ったといってよい。しかし、21世紀の長寿化社会に入った現在、中高年男性を高いQOLで支えるべきMedical Urology及び Andrologyの領域の臨床的役割が重視されるようになって来つつある。

そこで、各科領域の専門家方と手を携えー致協力しつつ、男性を創り上げている男性ホルモンの医学を中心に、男性の健康医学(Men's Health 医学全般)の研究・啓蒙発展させねばならなくなって来た。

その為、昨年秋、日本Aging Male研究会を改組する形で、日本Men's Health 医学会が創立された訳である。その医学会の中で、わが泌尿器科学会は、中心となって、新時代に即したMedical Urologyの立場から大いに活躍すべき責務を負っていると信じている。

以上のような現実の下、今回創立された日本Men's Health 医学会発足を記念し、学会の紹介も兼ね、泌尿器科学会会員の皆様、ことに臨床第一線で活躍されておられる日本臨床泌尿器医会のメンバーの方に、本学会への御理解・御支援を得られるように、このセミナーを計画した次第である。

セミナーのテーマとして、この分野で現在注目されている男性更年期障害、メタボリック症候群、またサプリメント治療の3分野を取り上げ、皆様とともにその問題点を検討する予定である。多数の皆様のご参集を願って止まない。

理事長 熊本 悦明

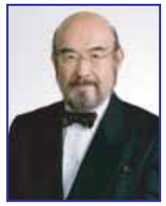
開会の辞

日本泌尿器科学会理事長 奥山 明彦 先生

講演1

座長：清原 久和 先生 (日本臨床泌尿器科医会副会長 市立豊中病院副院長)

18:10～18:40



『テストステロンの臨床 ー男性更年期障害をどう考えるかー 』

熊本 悦明 先生
日本Men's Health医学会理事長
日本臨床男性医学研究所所長

東京大学医学部 卒業
東京大学講師(泌尿器科学講座)
University of California, Los Angeles留学
札幌医科大学医学部教授(泌尿器科学講座主任)
札幌医科大学医学部 名誉教授
財団法人 性の健康医学財団 名誉会頭
日本臨床男性医学研究所 所長

最近男性更年期障害が、医学界のみならず、広く社会的にも注目される様になってきており、臨床的にも該当症例はかなり多い。

ただその男性更年期障害を、最近定着し始めた"Late-onset Hypogonadism(LOH)という概念の中で、どのように位置付けるものかについて、いまだ色々論議のある所である。

女性側と同様に、更年期障害として、性ホルモン低下と生活上のストレスにより、心身症症状や反応性うつ症状が混在する形の臨床症状を訴えてくる。ただ男性側はMid life crisisと言われるように、ストレスによる心身症症状やうつ反応がかなり前面に出ていることが多い。
今回はそれら症例がfree Testosterone値が低くなっている にも拘らず、LH値の上昇を見ないという病態生理を中心に、その背後にある心身症症状やうつ反応との関連性を分析しながら、臨床像の解析や治療学などにつき、自己データをまとめつつ、男性更年期障害についての意見を述べてみたい。

講演2

座長：堀江 重郎 先生 (帝京大学医学部 泌尿器科学 教授)

18:40～19:10

『サプリメントと抗酸化ストレス』

大澤 俊彦 先生
名古屋大学大学院生命農学研究科 教授

1946年、兵庫県(姫路市)生まれ。69年東京大学農学部農芸化学科卒業。74年同博士課程修了。
その後、74～77年オーストラリア国立大学リサーチフェローを経て、名古屋大学農学部助手、助教授の後、現在、名古屋大学大学院生命農学研究科教授。その間、89年より1年間、カリフォルニア大学デービス校環境毒性学部客員教授。農学博士。
主な著書に「がんを防ぐ52の野菜」、「胡麻の謎」、「活性酸素」などがある。

野菜や果物などに含まれる「植物成分」(フィトケミカル)が、「がん」や「動脈硬化」など、「生活習慣病」の予防にどのような機能を果たすのか、科学的に解明しようという研究の流れは、アメリカでは、1990年に「デザイナーフーズ」計画としてスタートし、演者も計画の当初より参加し、フラボノイドやアントシアニンのようなポリフェノールをはじめ、イオウ化合物やテルペノイド、アルカロイドなど、「フィトケミカル」を中心としたサプリメントによる疾病のリスク低減には、"バイオマーカー"(生体指標)を用いて科学的なアプローチで腸管免疫や吸収、代謝など、分子レベルでの役割に関して解明することが必要である。最近では、ゲノム解析からプロテオーム解析に研究の流れは大きく展開しており、遺伝子発現以後のタンパク質マイクロアレーの開発に大きな注目が集められている。

われわれは、科学的な根拠を持つ「サプリメント」の開発を目的に、「酸化ストレスバイオマーカー」を集約的に評価するためにチップ化した「抗体チップ」の開発研究を中心に研究を進めつつある。本講演では、これらの「抗酸化サプリメント」による酸化ストレス制御による疾病予防の可能性の最新の研究成果を紹介してみたい。

講演3

座長：藤澤 正人 先生 (神戸大学 大学院 腎泌尿器科学分野 教授)

19:10～19:40

『動脈硬化と生活習慣病 ー非専門医でできる基本的なマネジメントー 』

守山 敏樹 先生
大阪大学保健センター 教授

昭和58年3月	大阪大学医学部卒業
昭和62年11月～平成3年1月	米国国立衛生研究所客員研究員
平成3年2月～平成7年12月	大阪大学医学部附属病院医員(第一内科)
平成8年1月	大阪大学健康体育部・助手
平成9年7月	大阪大学健康体育部・講師
平成15年5月	大阪大学健康体育部・助教授
平成16年4月	大阪大学健康体育部・教授
平成17年4月	大阪大学保健センター・教授(改組に伴う異動)
平成18年4月	大阪大学保健センター長

動脈硬化の危険因子としてメタボリックシンドロームが注目されている。メタボリックシンドロームとは内臓肥満、空腹時血糖高値、高中性脂肪血症、低HDL-コレステロール血症などの代謝異常と高血圧が個人に集積した心血管易発症状態である。動脈硬化の重要な危険因子である高LDLコレステロール血症への対策はスタチンを含む薬物療法の進歩によりほぼ確立したといってよい現在、ライフスタイルが深く関与する病態の集積であるメタボリックシンドロームは、次の心血管病対策の主要ターゲットとして医療のみならず行政等社会の各方面から注目を集め、昨年末には流行語大賞に選ばれるなど、ひとつの社会現象となった感もある。

本講演では、実地医家が担うメタボリックシンドロームへの介入について考え方を解説し、また、欧米で議論されている男性更年期との関連についても紹介したい。

閉会の辞

日本臨床泌尿器科医会会長 吉田 英機 先生